

北蒲原郡笹神村貝喰の湿地の危機

— クリ園に改変か —

平山 亜希子

水辺では、光の当たる具合や水分条件、栄養条件に応じて様々な種類の植物が生育する。私が植物を学び始めて間もない頃、早春から継続して里山地域の植物を中心に調査していた。里山にも休耕田や堤のような湿地があるが、もちろん早春にはほとんど特色があらわれていなかった。初夏になり採集も慣れた頃、なめきって御無沙汰していた水辺は、様々な草本が茂り豹変していた。本格的な夏になるにつれ、種類はどんどん増え、水辺植物のあまりの多さにくらげられかけたものである。また、動物にとっても良好な生息空間であり、特にトンボなどの水生昆虫やサギなどの水鳥を学ぶ機会にもなった。

しかし、水辺は年々減少している。自然状態にある水辺は周辺に住む人々にとって必ずしも有用なものではないからだろうか。ときに、洪水の原因になり、害虫・雑草の発生源となったりして、農業用水に必要なでなければ、ほとんど無用の土地として扱われている。「こんな土地、何にもならねっけ」と、開発や護岸、生活排水、農薬の流入がひとたびあると、環境条件の微妙なバランスの元に生育している水辺植物は逃げ場がなくなる。

新発田市、北蒲原郡豊浦町、笹神村、水原町に位置する笹神丘陵は洪積層からなり、山腹の所々に湿地が点在している。それぞれ、県内では数少ない湿原植生を持ち、寒地系湿性植物が多く生育する。その湿地の一つである豊浦町の本田山湿原は、県自然環境保全地域として指定されており、笹神村村岡にあるジュンサイ池と共に新潟の優れた自然にも選定されている。

現在では数少ない湿原植生であるが、麓の住民にとっては特別珍しいものでもないようであり、昔はもっとたくさん湿地があったという。調べてみると、その記録は標本にも多く残っていた。標本の記載地は、現在ではゴルフ場建設や土地造成によって埋め立てられてしまったところが多かった。また、乾燥化が著しく、ヤブ化が進んでいる湿地もあった。

この丘陵の南に位置する笹神村貝喰地区も、かつては広大な湿地が存在していたようであった。砂礫を掘り下げて田んぼをつくり、水路を切って排水し畑を作った跡が見られる。しかし、その中でも未だに開発されていないところがあった。標高40m、丘陵の中腹でなだらかな斜面に、オオイヌノハナヒゲをはじめとするミカヅキグサ属が優占する小湿地が幾つか残っていた。規模は5×5m程度のものから30

×40mのものまで、10ヶ所ほどがササヤブの間に点在している。植生は次のようであった。

笹神村貝喰40m[地図座標392375-14][1999, Oct, 8]

面積:1×1m、傾斜:4.5度、方位:N82E

草本層(植被率30%、高さ30cm)オオイヌノハナヒゲ(2・2)、イトイヌノハナヒゲ(+2)、イヌノヒゲ(+2)、コシンジュガヤ(+), コイヌノハナヒゲ(r)コバギボウシ(r)、キンコウカ(r)、モウセンゴケ(r)、アカマツ(r)、サギソウ(r)、カリマタガヤ(r)、トキソウ(r)

面積:1×1m、傾斜:4.5度、方位:N82E

草本層(植被率20%、高さ5cm)ミミカキグサ(1・2)、イトイヌノハナヒゲ(+2)、イヌノヒゲ(+), ムラサキミミカキグサ(r)、オオイヌノハナヒゲ(r)、コイヌノハナヒゲ(r)、ヨシ(r)、モウセンゴケ(r)、カリマタガヤ(r)

この湿地群は規模が小さいものの、地形や植生は自然保全地域である本田山湿原にきわめて類似している。絶滅危惧種は、サギソウ、トキソウ、ミズトンボ、ムラサキミミカキグサ、カキツバタ(それぞれⅡ類)、県内貴重種としてコシンジュガヤ、サワギキョウ、ノハナショウブが生育する。笹神丘陵内の植物相と比べると絶滅危惧種や県内貴重種はこれらの湿地に集中して分布していることがわかった。しかし、近接してクリ園があり、かつてゴルフ場の計画もあったことから、緊急な開発の心配があった。

今年8月には、ついにそれらの湿地の一部がブルドーザーによって破壊されていた。一ヶ月まえまで湿地であったはずのところは、その周辺の木々もササヤブも跡形無くなぎ倒され、全く景観が変わっている。この湿原を守ろうと2年間観察してきた私にとって、あまりに突然のショックで言葉が出ない。隣接する湿原はまだ無事のようにであったが、土を盛り上げているため水理や水質は変わってしまいそうである。工事の施工主はクリ園の持ち主で、湿原は近いうちに全部クリ園にする予定とのことであった。

保護できなかった理由の一つは、土地の持ち主が村外の人だったということ。私は、長期にわたって湿地を観察したいとき、土地の所有者には必ず許可を取るようになっている。本来ならこの際に、どうして観察をしたいのかを説明することができる。しかし、たいいていは民有地であり、何

地を所有しているのかは所有者本人しかわからない。しかたなく、地域の代表者（区長など）に許可を頂くことになってしまうのだが、村外の人ではなおさらこちらの意図は伝わらない。土地に愛着が薄く、植物は二の次になってしまう。

もう一つは、地域の理解だろうか。私はこの湿地で植物を大量に根こそぎ採集する人達と何度か対面している。多くは隣町からやって来るようであったが、村内の人もこのことをよく知っているようであったし、この湿地は貴重だという言葉は聞かれなかった。年輩の方は特に、湿地を開墾して田畑を増やしてきたので、湿地が身近過ぎるためだろうか。

県内に記録のある低地の湿地で、同様の植生を持つものを探してみた。小千谷市越路原に記録があったが、20年の間に植生が遷移してススキ草原になっていた。その他の所は田や畑になっているところが多かった。だから、この湿原も開発されずとも、あと20年経ったら乾燥化が進んで全部ササヤブになっていたかもしれない。開発される前に、湿地の植物を他の湿地に移したとしても継続して管理しなければ、維持できないかもしれない。しかし、私が初めて低地でトキソウやサギソウが自生しているのを見たときの感動は忘れない。たとえ20年の命でも、その間に、知らない大人や子供達に貴重な自然を体感させてあげることは出来たのではないだろうか。



笹神村貝喰40m 00. 9. 18



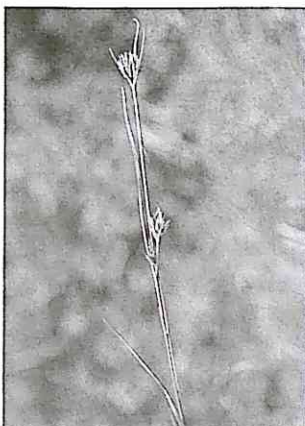
開発前 近くの湿地 98. 9. 18



コシジュガヤ 98. 10. 6



ヤチスギラン 98. 10. 6



オオイヌノハナヒゲ 98. 10. 6



エゾリンドウ 98. 10. 7



ミミカキグサ 98. 9. 19



ムラサキミミカキグサ 98. 10. 7